

調査員のコラム

「子ども時代に感じた不思議さ・おもしろさから」

谷山子どもの権利調査員

(在籍期間：H29.4～)

私は、風呂に入るのが大好きで、家庭風呂よりは、スーパー銭湯によく行きます。お風呂と言えば子ども時代に、友だちと風呂屋さんが開店する時刻に行き、浴場が我々の遊び場になったり、浴場に水を入れたりしてよくお年寄りから叱られたというような懐かしい思い出があります。また、運動会終了後の銭湯の込み合っていた状況や冬の銭湯からの帰り道、タオル回しをし、その凍ったタオルでチャンバラをしたことなど、今でも鮮明に記憶に残っています

スーパー銭湯では、昔のお風呂屋さんと同じように、子ども同士で、お父さんと、またはおじいちゃんと一緒に来た子どもの姿を見かけます。お父さんに叱られた子が「いつまでも一緒にお風呂に入ってあげるから、そんなに怒らないで」とか、サウナ室で「どうして大人ってあんなに汗をかいているのに我慢できるの、カラカラになるよ」など、子どもの発想やものの見方・考え方が独創的でおもしろく、ときどき、子どもの発言に笑ってしまいます。

子ども時代には、「早く大人になりたいなあ」「大人になったらあんなことをしたい」など、漠然とした憧れやおもいをもっていました。しかしながら、スーパー銭湯で見られる、昔と変わらぬ風景に懐かしさを覚えながらも、いつの間にかなくなってしまった子ども時代の自由奔放だった自分の姿に気づき、歳月の流れを実感することがあります。小学6年生の国語の教科書に「白い風船」という物語が載っていました。遠藤周作さんの作品です。小学2年生の凡太は、テレビが大好きでマンガばかり読んでいた少年でした。忍者に憧れたり、宇宙人に会いたいと夢見たりしながら、想像力たくましかった凡太がやがて6年生になります。冬の夕方、まっかに燃える山を見ながら、凡太は、むかしの自分なら、いろいろと想像したけれど、大人になるということは、不思議なことをもう見られなくなるのかとふと考えます。そんなある日、久しぶりに望遠鏡を出し覗いて見ると、昔円盤を見た丘の方角に、突然、丸い白いものがゆっくり空に飛んでいくのが見えてきます。その時の凡太の気持ちを表した「それは白い風船にすぎなかった。丘に建った家のどこかで、子どもが手放した風船が、ふわふわと空に飛んでいってただけだった。」という文章がなんとなく切なかったなあということを感じたことがありました。

仲間との話し合いで「いつまでも子どものときの感性や感受性を持っていたい」という話題になったことがあります。大人へ成長していくにつれて、夢中になることや失敗を恐れて、何かと言い訳をしてやらなくなることが多くなったという結論になりました。人は成長と共に、経験や体験の機会が増え、そのことによって、客観的に、物事を見たり、判断したりすることが多くなります。反面、子どもの言葉に耳を傾けたり、子どもが暮らす環境を知ったりという、子ども目線に立つことが薄れがちになる傾向があるようです。

アシストセンターでは、いろいろなおもいを持った子どもたちの相談を受けます。子どもたちの声やおもいに寄り添い相談を受けますが、直ぐに問題解決の方法を見つけることにつながらない場合があります。しかし、「ああ、話を聞いてもらった、わかってもらった、少しホッとした」と、子どもたちの心の中にあっただんまりとどんよりしたものが薄れていくのを感じることもあります。仕事も遊びも本気で夢中のときほど、子ども時代の自分の姿や不思議さとの出会いが多いような気がします。映画ではないですが、自分の「スタンド・バイ・ミー」を振り返ることによって、今の子どもたちと自分の子ども時代と重なる部分もあることに気が付くのも年を重ねてきているせいでしょうか。

「魔法の杖」

佐藤子どもの権利相談員

(在籍期間：H29.4～)

童話に出てくる魔法使いは、不思議な杖を持っている。そして、呪文を唱えながら魔法の杖を振ると、あっという間に願いはかなってしまう・・・。

ずいぶん昔の話になるが、膝の靭帯を切って、病院に入院していたことがある。再建手術をして、車椅子や松葉杖での生活を数週間も強いられた。つらいリハビリを毎日頑張って、やっと歩く練習を始めたばかりの頃であった。

用事があって、病院から外出の許可を得て、地下鉄を利用して街へ2度ほど行くことになった。その頃の私は、病院内では松葉杖ではなく、一本の杖をついて歩いていた。

1回目。自分の足で歩くのがうれしいのと、杖を持って歩くのが恥ずかしくて、杖を持たずに街へ向かった。街はそれほどの混雑ではなかったが、平気で私にぶつかってくる人や、手や体を使って私の体を押してくる人が何人もいた。その度に、私は体勢を崩し、何度も転びそうになった。そして、膝には激痛が走った。私は、心も体もへとへとになって、やっとの思いで病院へたどり着いた。

1週間後、再び街へ向かった。膝の調子は良かったが、前回の反省を踏まえて、今度は杖を持って、病院を出た。街は年末を迎え、大変な人ごみだった。また同じ思いをするのではないかと不安にかられたが、この杖は不思議な力を発揮してくれた。私の周りの人たちは、わたしにぶつかるどころか、近づいてくる人すらいなかった。私の周りには、ぽっかりと空間ができていたのだ。結局、私は誰にも接触せず、痛い思いもしないで、無事に病院に戻ることができた。

杖には、自分の足を補助するということ意外に、自分の足が不自由だということを周りの人に知らせるといった大切な役割もあったのだ。

アシストセンターには、子どもたちや保護者から、電話・メール・面談を通じて、様々なメッセージがたくさん届きます。

悩みや苦しみを抱えている子どもたちには、勇気を出して、自分の置かれている状況と素直な気持ちを言葉に出して、周りの人に伝えてほしいと強く願っています。また、一人ひとりが心に抱いている素敵な夢についても、恥ずかしがらずに、言葉に出してほしいと願っています。

言葉には、不思議な力があります。メッセージを出し続けていると、あなたの周りの人たちは、必ずあなたを応援し、助けてくれるはずです。それは、私が体験した杖を持って歩くことと、同じ効果を発揮するはずです。あなたは、一人ではないのです。

魔法の杖は、本当にあるのです。あなたも、ぜひ使ってみませんか？

「子育てに思う・・・」

青木子どもの権利相談員

(在籍期間：H28.4～H31.3)

この春、下の子が大学に進学し子育てに一区切りがつかしました。(子育てはまだ続きますが) そんな時、上の子の習い事を通して知り合ったお母さん(ママ友)と何年か振り(10年振りくらい)にお会いする機会がありました。

お互いに「変わらないね!？」と思いやりのある言葉で再会を喜び、成長した子どもの情報交換後、話題は10年前にタイムスリップ。

二人ともに仕事を持ちながらの子育てで、共通点も多く、まだまだ育児に手がかかり、毎日時間との戦いで、自分の時間など持つ事が出来なかった時期でした。

子どもの学校も住んでいる地域も違って、これが丁度良い距離感だったのか、子育ての事、子どもの勉強の事や学校の事、時には夫の事まで色々な事を話し、情報交換したり、相談し合ったり、お互いに気持ちを共感し合ったりと、1週間に1~2回、子どもが習い事をしている間のおしゃべりでしたが、この時間がいつも楽しみで、程よい息抜きの時間でした。

「あの頃は、子抜きでランチなんて考えられなかったよね。」と話しながら、子育てに奮闘して大変だった頃の事や色々あったエピソードを懐かしく思い出し、ランチ会はあっという間に時間が経っていきました。

最近、イクメンという言葉や父親が育児休暇を取る事も珍しくなくなり、父親が育児に関わる時間が増えてきたとは言われますが、まだまだ母親が関わる時間の方が多く、アシストセンターに寄せられる子どもの相談も父親よりも母親からの相談が圧倒的に多くて、相談内容からも、子育てに関わる時間や負担は、まだまだ母親に多くかかっている事がわかります。

<参考>

*平成30年度札幌市子どもアシストセンターへの相談者内訳から母親からの相談：47.3%、父親からの相談：4.8%

アシストセンターには、悩み解決やアドバイスを求めて、母親から子育てに関わる相談が沢山寄せられます。相談はまずは、相談者の話を聞くことから始まりますが、相談者の方は、それまで胸の中に溜めていた辛い思いを吐き出すだけで、心が軽くなりました。聞いてもらってスッキリしました。と言われる方もいます。

今自分が子育ての終盤間近を迎え、また、10年振りにママ友と子育てを振り返り、改めて思うことは、『子育ては、一人で頑張り過ぎない事』『子育ては、一人で悩まない事』です。

子どもにとっては、色々な立場の人との関わりの中で育つことの方が良いと思いますし、それは、子育てをする母親にも必要なことだと思います。

子育てには、時間だけではなく、気力や体力も必要です。そして更に、色々な知恵やアイデアや時には技も必要になります。色々な立場の人との関わりが多ければ、知恵やアイデアや技も増えます。また、相談できたり、思いを共有できる人や場所の存在も大事です。アシストセンターへの相談も選択肢の一つに入れていただくと嬉しいです。

ママ友とのランチ会の最後は、お互いの健康と老後の心配、そして親の介護の話で締めくくり、またの再会を約束して終わりました。

子育ては大変だけれど、子どもは親の姿をよく見て育ちます。子育てのゴールは見えてきましたが、母としてもう少し頑張ろうと思いつつながら帰路に着きました。